ランチ会 ＆ 奈良きたまち散策

長かった夏もようやく終わり、さわやかな天気に恵まれた秋の 1 日、標記の会を開催しました。近畿地区には大阪支部・京都支部・神戸支部・奈良支部の 4 つの支部があります。近畿地区では JR や私鉄の交通網が発達していることから、これまで以上に支部間の交流を深めていこうと支部長間で話し合い、イベントは近畿支部グループの主催としました。今回は、奈良支部が担当しての開催となり、大阪支部 2 名、京都支部 3 名、神戸支部 1 名、奈良支部 5 名（合計 11 名）の会員の参加がありました。

ランチは近鉄奈良駅近くの和食レストラン「やまと小町」で頂きました。4 支部の会員が集い、話をするよい機会になりました。

奈良から京都へと続く旧奈良街道沿いに広がる、近鉄奈良駅の北側一帯を「奈良きたまち」と呼びます。昼食後、バスで奈良阪まで移動し、最初の訪問場所である奈良豆比古神社で、ボランティアガイドの森田さん（なら観光ボランティアガイドの会朱雀）と合流しました。

奈良豆比古神社前で説明を聞く参加者

神社に奉納された御造営記念の額

奈良豆比古（ならづひこ）神社は万葉歌人としても有名な志貴皇子（田原天皇・春日宮天皇）を祀る神社です。志貴皇子は天智天皇の子で光仁天皇の父であること、天武系で占められた奈良朝末期、称徳女帝に子がないことから天智系の光仁が即位し、父である志貴も力を得たとの説明を受けました。能楽の源流である猿楽がこの神社で発達したとのことで、いわば能楽発祥の地と言えることの説明もありました。

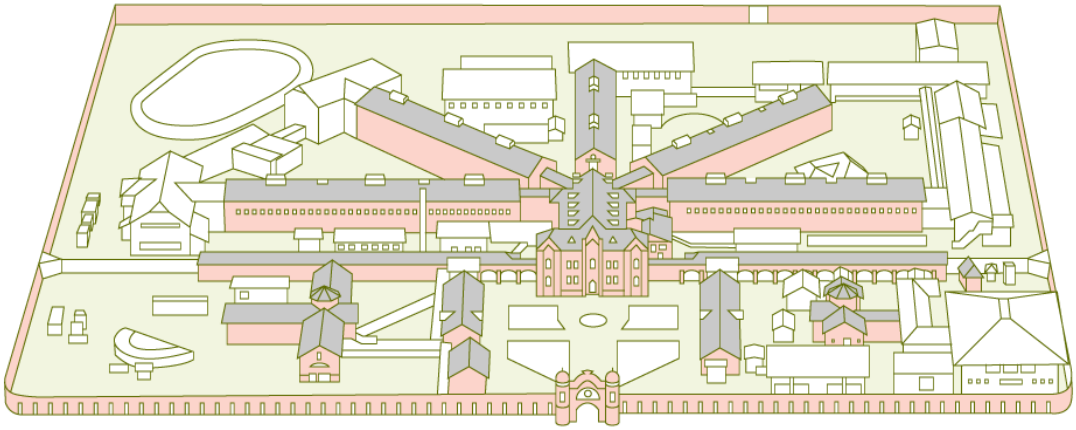
奈良でいちばん古い牧場（明治 16 年創業）と言われる植村牧場では、今も牛が飼育されています。牧場の新鮮な牛乳でつくられたなめらかで美味なソフトクリームを食べながら、しばし休憩。その後、森田さんからは般若寺の説明がありました。今回は時間の都合で中には入らず、鎌倉時代の優美な建築様式の楼門(国宝)を見るだけとなりました。

植村牧場

般若寺楼門前にて

般若寺からの緩い坂を下って次に訪問したのは、旧奈良監獄（元少年刑務所）です。中に入ることはできませんが、レンガ造りの表門前で、造られた経緯や実際に使われていた当時の様子について説明を受けました。森田さんが準備してくださった資料には、以下の記述があります。

> 明治 35 年に当時の金で 30 万円を費やし、7 年をかけて建設された（明治 41 年完成）。司法省営繕課の技師でジャズピアニスト山下洋輔の祖父山下啓次郎が欧米諸国の監獄を視察し、刑務所に「更生するための場所」という理念を取り入れて設計。ハビラントシステムという建物配置で中央の一点に立つと、全体が監視できるシステムを持つ。近代奈良の赤レンガづくりの洋風の名建築



旧奈良監獄ウェブサイトより引用（https://former-nara-prison.com/architecture/）

表門から中をのぞくと、工事中の建物が見えました。ウェブサイトで検索してみると、星野リゾートによる「星のや奈良監獄」が 2026 年に開業予定という記事がありました。当時の建物の基本構造を利用したホテルができるとか。以下の URL にホテルの紹介があります。

https://hoshinoresorts.com/ja/brands/hoshinoya/sp/hoshinoyanaraprison/

この近くにある若草中学校は松永久秀が建てた多聞城跡にあるとのこと。多聞城は四階櫓を持つ豪華な城であったことや、久秀の信長との勇壮果敢な戦いぶりの紹介があり、この地が、京都と奈良を結ぶ街道の要になっていたことも再認識しました。

旧奈良監獄表門

工事中の建物

次に訪問したのは、北山十八間戸。森田さんの資料には以下のように説明されています。

鎌倉時代（1243）西大寺中興の祖叡尊の弟子忍性がハンセン病患者、弱者の救済のため、般若寺の東北に創建したのが始まり。戦国時代に松永・三好の戦いで焼失したが、江戸時代（1660 年頃）奈良奉行中坊時祐により、現在地に復興された。忍性は弱者救済のために、「文殊菩薩信仰」を通して、延べ 18000 人の患者に衣食住を提供し、救済活動を行った。

十八間戸は、東西に長い建物が 18 室に区切られていたことから名づけられたとのこと。ハンセン病が伝染病と考えられていた時代に、ハンセン病患者はじめ社会的な弱者救済に尽くした僧がいたことを知りました。

北山十八間戸の説明を聞き終えて更に南に進むと、佐保川に出ました。佐保川は、多くの奈良支部会員の母校である奈良女子大学の北側を流れる川であり、何度も通ったことがある場所です。しかし、そこにかかる橋には「いしばし」の表示があることを初めて知りました。森田さんの話を聞き逃してしまったので、「奈良きたまち」のウェブサイトにある説明から、その一部を紹介します。(https://www.kitamachi.info/spot/tegaicho.html)

佐保川に架かる長さ 15m の大きな石橋。かつての奈良街道の賑わいを示す証人。
今在家の石橋は、慶安 3 年(1650 年)にかけられた記録が残っています。
京都や伊賀、八幡への玄関口として重要な橋であり、奈良奉行所によって南都で唯一架けられた橋。

北山十八間戸

石橋の説明をするボランティアガイドの森田さん

佐保川を渡って間もなく、転害門が見えてきました。以下、森田さんの資料からの転害門に関する引用です。

平城京一条南大路に面し、東大寺西面大垣の最も北の門で、二度の戦火から免れ天平期の風格を伝える貴重な建造物です。転害門の名前の由来は、大仏守護のため宇佐八幡神を迎えた時、この門から入り殺生を禁じ「害を転ずる」にあるといわれています。

転害門の前から西側を見ると細い道が見えます。昔は幅 24mのメイン道路だったとのこと。今の道からは想像できませんが、お話を伺うことで、昔の奈良の様子を垣間見るよい機会となりました。

転害門の前にて

転害門から見た佐保路

今回は、奈良時代の能楽発祥の地から歩き始め、いくつかの場所で説明を聞きながら、鎌倉時代、江戸時代、明治時代の建物を訪ね、京都から奈良へと続く街道筋での人々の生活にしばし思いを馳せる散策でした。ガイドをしてくださった森田さんに感謝です。ご参加いただいた皆さまもありがとうございました。

（文責・写真　奈良支部長　中道貞子）

各支部長からのコメント

中村茂子大阪支部長

近畿の支部それぞれが思う通りに活動ができない中でも、情報交換をして交流を続けたいとの話合いがあり、今回は、奈良支部に「奈良の史跡見学」を実施していただきました。今回の計画は明日への活力となるものでした。ありがとうございました。

今後も交流の場として、近畿支部グループで史跡見学などを実施できればと願っています。奈良の史跡以外にも、二条城、宇治界隈、姫路城などが思い浮かびます。

会員同士のつながり、会員の中でも特に世代を超えたつながり。社会と私のつながり、一人で寂しいと声なき声に耳を傾けようとするつながり。これからの世界は“繋がり”がますます重要視されていくことでしょう。

久保宜子京都支部長

心地よい秋晴れの一日、奈良支部のお世話で「ランチ会と奈良きたまち散策」のイベントを四支部合同で開催し、楽しい時間を持つことができたことはとても有意義なことでした。

ランチ会では日頃なかなかゆっくりお話をすることのない他支部の方と親しくおしゃべりができて友好の輪が広がったことは嬉しいことです。

いつもは車でサッと通り過ぎる道を今日は一歩一歩歩くことによって、昔の街道筋の賑わいや貴重な建物など歴史を今に伝える様相をたくさん見ることができて、奈良の奥深さを感じることができました。

奈良が発祥の元というものがたくさんあることも初めて知りびっくりしたり、住宅地の中にある植村牧場で可愛い仔牛に癒されたり、かなりの距離を歩いたにもかかわらず疲れを感じることなく楽しい一日でした。

松村和子神戸支部長

1 か月に 1 回ぐらい奈良を訪れているのですが、「奈良きたまち」は初めてです。

観世流のお能を 20 数年習っております。奈良豆比古神社が能楽発祥の地と初めて知りました。一番興味のあった奈良監獄。中には入れなかったですが、かなり立派な建物で機会があればゆっくり見学したいですね。奈良支部の方に今まで行くことのなかった地区を紹介していただき有意義な時間を過ごせました。ありがとうございました。

これからも各支部、「ここを紹介したい押しの場所」を紹介してください。訪れたいです。